魔法少女リリカルなのは～原作を壊す転生者～

グレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～原作を壊す転生者～

【Ｎコード】
Ｎ３０６１ＢＡ

【作者名】
グレイ

【あらすじ】
なのはの世界を書いてみたっかたので書いてみました。
チート嫌いや、ハーレム嫌いは見ない方が良いです。
それでは、魔法少女リリカルなのは～原作を壊す転生者～始まります。

プロローグ（前書き）

初めての投稿なのでおおめにみてください。
それでは本編始まります。

プロローグ

＜真っ白な空間＞

・・・俺は今、変な状況の中にいる・・・

ん？何言ってんだだって？

だって、真っ白な空間にいて、目の前で土下座してるおっさんがいるんだぜ～

おっさん「本当にすまなかった！！！」

しかも、いきなり謝ってるし・・・

主人公「とりあえず謝ってないで状況を説明しろ・・・」

～説明中～

主人公「なるほど・・・つまり、アンタの間違いで俺は死んだのか？」

と神様一（自称）が、俺が死んだのはコイツの間違いのせいなのか・・・

・・・・何かムカついてきた・・・・・

神様「悪かったと思っている・・・だが！？私は謝らない！！！」

さっき思いっきり土下座して謝ってただろ・・・

神様「まぁ～冗談はここまでにして、喜べ、おぬしを転生させるぞ！！！」

・・・・・・は？

主人公「何言ってんだジジイ！！！俺はヤダぞ！！！さっさと天国か地獄送れ！！！」

どうせアニメの世界とかに転生させられんだろ！アニメの世界って何かと面倒設定だからな・・・

神様「頼む！！！これがばれたらわしが罰せられてしまう！！！」

むしろ罰せられろ・・・
神様「頼む！！！何か願いを叶えてやるから！！！」
まぁ～聞くだけ聞いてみるか・・・
主人公「転生するかはどうかは置いといて転生先は何処だ？」
ここ一番重要だからな。
神様「《魔法少女リリカルなのは》じゃ。」
なのはか～まぁ～話は面白かったしいいか・・・
主人公「分かった。転生してやるよ。」
神様「本当か！？」
主人公「あぁ。んで、能力いいか？」
神様「あぁ！遠慮うせずに言ってくれ！」
じゃ～遠慮うせずに・・・
主人公「まず、俺をリボーンのツナの容姿にしてくれ。んで、戦う時は常に超死ぬ気モード、
魔力はＥＸランク、身体能力、学習能力、精神力、気もＥＸランクで、
レアスキルに超直感、魔力吸収、調和、武器はＸグローブで、デバイスの形はボンゴレリングで。」
神様「なんじゃ、それだけか？」
主人公「あぁ、それだけ。」
神様「欲ががないの～―（内緒で能力付けとくか）」
主人公「十分チートだと思うが・・・」
超直感や魔力吸収なんか最強だろ。
神様「あ、ちなみに前の名前使えないから名前を変えてくれ。」
名前？何にするか・・・・・よし、これにするか。
津波「楯宮津波（たてみやつなみ）で頼む。」
神様「分かったのじゃ、頑張っての。」

こうしてなのはの世界に一人の男が行った。

プロローグ（後書き）

この小説みてくださってありがとうございます。
なるべく早く投稿できるように頑張ります。

主人公設定一（ネタばれアリ）

主人公設定

名前　楯宮津波（たてみやつなみ）

年齢なのは達と同い年

身長　無印１２６ｃｍ　Ａ，ｓ１４２ｃｍ　ｓｔｒｉｋｅｒｓ１７５ｃｍ　ｖｉｖｉｄ、Ｆｏｒｃｅ１８６ｃｍ

生年月日１０月１４日

性格　本来ならめんどくさがりな性格だが、神様によって真面目で優しい性格に変えられた。
　戦闘時は冷静で無口、でも、敵だろうと情けをかける。

好きなもの　家族、仲間、友達。
嫌いなもの　友達や仲間を侮辱する人。
　趣味　家事全般、アクセサリー作り。

容姿　リボーンのツナ。

魔力光　オレンジ

術式　ミッド、ベルカの完全混合ハイブリット

レアスキル　超直感、魔力吸収、調和、ｖｉｖｉｄからは重力

操作も出来るようになる。
ボンゴレの記憶―（神様が勝手に付けた能力。津波がピンチや困った時にボンゴレⅠ世
が、助けにきてくれる。本人はａ－ｓが終わるまで知らない）
魔力資質　Ｅｘ
魔力変換資質　火―（死ぬ気の炎）氷（零地点突破初代―エディション
デバイス
名前　イクス
性格　律儀　津波のことをボスと呼ぶ。
形状　無印　大空のボンゴレリング　ａ－Ｓの終盤　ＮＥＷボンゴレリング
ｓｔｒｉｋｅｒｓの終盤　ボンゴレギア―（大空のリングｖｅｒ、ｘ）
ｖｉｖｉｄの中盤　ボンゴレギア―（シモンリング合体版）

津波「おい！！！何で性格変えるんだよ！！！」
神様「そりゃーツナは仲間想いの奴だからのぉ～、めんどくさい性格は似合わないと
思ったからじゃ！」
津波「ふざけるな！！！」
神様「しょうがないじゃろ～作者がそっちの方が書きやすいと

言ってたからの～」

作者「はい！！！バリバリ書きやすいです（＾＾）」

津波「はぁ～しょうがねいか～作者初めての小説だからな、おおめにみてやるか・・・」

作者「ありがとうございます（＾＾）」

なのは世界に転生

＜海鳴市＞

津波「んっ・・・着いたのかな？」

さっきまでいた真っ白な空間じゃ無いから多分なのは世界に来たんだろ。

？？？「お疲れ様です、ボス。」

んっ？この声は・・・多分デバイスだろうな。

津波「君が俺のデバイス？」

イクス「はい、ボスのデバイス、イクスです。」

結構律儀デバイスなんだな～

津波「よろしくね、イクス。」

イクス「はい、よろしくお願い致します。」

津波「それでさイクス、ここ海鳴市だよね？」

イクス「はい、そうです。」

津波「そっか～ここなのはの世界なんだ～」

まさか本当になのはの世界に行けるとは思わなかったからな～

津波「さて、これからどうしよっか・・・んっ？そうえば・・・」

家ってどうするんだーーーー

津波「イクス！！！家ってどうするの！！！」

イクス「落ち着いてくださいボス、家とお金は神様が用意してくださいました。」

マジで・・・良かった～

津波「じゃー家まで案内してくれない？」

イクス「かしこまりました。」

津波「ところでお金ってどの位あるの？」

イクス「豪邸を世界中に買っても一生遊んで暮らせる位です。」

津波「・・・（唖然）」
そっ、そんなにあるの（汗）・・・

～なんだかんだで家に到着～

津波「・・・ねぇイクス・・・」
イクス「はい、何でしょう？」
津波「ここが俺の家？」
イクス「はい、ここがボスの家です。」
津波「何で・・・何で・・・こんなにでかいんだー！！！」
ハッキリ言って一人で暮らすにはでかすぎる！！！
津波「はぁ～とりあえず疲れたから家にはいろ・・・」

＜家（津波の部屋）＞

津波「やっぱり部屋も広い・・・」
ここ一人で暮らすにはでかすぎて逆に怖い・・・
津波「そうだイクス。」
イクス「何でしょうか、ボス？」
津波「バリアジャケットとか見たいから結界張ってくんない？」
イクス「かしこまりましたボス。」
津波「ありがとう。」
早くどうなってるか見てみたいんだよな～
イクス「ボス、結界張り終わりました。」
津波「ありがとうイクス。」
バリアジャケットどうなってんだろうな～
津波「じゃぁ～早速、イクス、セットアップ。」
そして津波は、額から炎が出て、リボーンのメローネ基地

に潜入した時の、
ツナの格好になった。
津波「これが・・・俺の姿か・・・」
津波は超死ぬ気モードになって変わった所は、
額に炎、瞳は茶色からオレンジに変わり、両手には炎を宿したグローブ、
耳にはヘッドフォンがついていた。
津波「イクス・・・XBURNERは撃てるか？」
イクス「はい、オペレーションイクスと言っていただければ何時でも撃てます。」
XBURNERを最初っから使えるのはいろいろ便利だな。
津波「ふぅ～さて、いろいろ見たから今日はもう寝よう・・・」
イクス「分かりました、お疲れ様したボス、おやすみなさい。」
津波「うん、お休みね～」

原作キャラとの出会い

＜海鳴市＞

《津波Ｓｉｄｅ》

津波「ふぁ～よく寝た～」

イクス「おはようございます、ボス。」

津波「うん、おはようイクス。」

なのはの世界にきて3日たった。

家事とかは、前の世界でもやっていたので問題なっかた。

津波「イクス、今何時？」

イクス「今は１１時５２分です。」

津波「ウソ！そんなに寝てたのか！」

前の世界でもたまにあったんだよな～

夜更かししてないのに起きるのが昼だったり、

ヒドイ時は3時まで寝てたこともある。

そして両親に死んでるんじゃないか？

とまで言われた事がある。

津波「今から作るのもヤダから外食にするか・・・」

さて、何処にするかな？

～移動中～

イクス「ボス、近くに喫茶店があります。」

津波「お、本当だ。ありがとうイクス。」

イクス「いえ、お役に立てて光栄です。」

津波「よし、あそこの喫茶店にするか。」

しかし、津波は気付かなかった・・・
そこは　ただの喫茶店でわなく・・・
魔王の家族が経営している・・・《翠屋》であることを・・・
・
《津波Ｓｉｄｅｏｕｔ》
《なのはＳｉｄｅ》
私は今お店の手伝いをしてるの。
カランカラ～ン♪
あっ、お客さんだ♪
なのは「いらっしゃいませ～」
津波「・・・・・・」
バタン！！！
にゃあああ！今の男の子私の顔見たら突然ドア閉めちゃったの～
カランカラ～ン♪
あ、戻ってきた。
うぅ～私なんかしたかな～
《なのはＳｉｄｅｏｕｔ》
《津波Ｓｉｄｅ》
なのは「いらっしゃいませ～」

津波「・・・・・・」

バタン！！！

落ち着け俺！今の女の子はなのはじゃないよな！
そっそうだ！？お店の名前！お店の名前・・・
・・・うん、完璧《翠屋》って書いてあるね。
はぁ～まさか魔王の喫茶店だったとは～
・・・よし！腹をくくって行くか！

カランカラ～ン♪

なのは「い、いらっしゃいませ～」

さっきいきなり出ってたから誤解をといとくか。

津波「さっきはゴメンね？知り合いと似てたからおどろいっっちゃて。」
なのは「うっうん、大丈夫だよ。」
津波「そっか、あっ、注文いい？」
なのは「はっはい！」
津波「アサリのパスタとチーズケーキと紅茶をお願いします。」
なのは「はい、かしこまりました。」
津波「よろしくね（ニコッ）」
なのは「…／／／あ、少々お待ち下さい～」

テッテッテッテ…ガッシャーン！！

だ、大丈夫かな？

～しばらく経って～

なのは「お、待たせしました～／／／」
津波「あ、ありがとう（ニコッ）
なのは「う、うん／／／」

どうしたんだろう顔が赤いけど大丈夫かな？

津波「んっ？あの～ケーキ一個多いけど・・・」
なのは「あ、それ私のなの／／／」
津波「そうなんだ、よっかたら一緒に食べる？」
なのは「い、いいの？」
津波「うん。」
なのは「そ、それじゃ・・・」
そう言ってなのはは向かい側の席に座った。

しばらく食べてるとなのはが、

なのは「わ、私高町なのはって言うの。と、友達になってほしいの！／／／」
マジで・・・あって一時間も経ってないのに友達なってと言われてしまった。
なのは「だ、ダメかな・・・？」
不安そうにこっちを見ている、まぁ～断る必要もないので・・・
津波「別にいいよ。」
なのは「やったぁ～！」
今度はすごくいい笑顔で喜んでた・・・か、かわいいな・・・／／／
津波「あ、俺の名前まだだったね、俺は楯宮津波、気軽にツナて

っ呼んで（ニコッ）」
なのは「う、うんツナ君／／／」

これが津波の初めての原作キャラとの出会いだった・・・

～続く～

今度は金色とオレンジ色の奴（前書き）

初戦闘シーンです。

今度は金色とオレンジ色の奴

＜海鳴市＞

津波「はぁ～暇だ～」
なのはと友達になってから一週間たった。
あれからなのはとよく遊びに誘われるようになったけど、
なのはは今日店の手伝いなんだよな～
はぁ～何しよう・・・
津波「とりあえず外出るか・・・」

～散歩中～

津波「・・・・・・・」
俺は今すごいもの見つけてしまった・・・
津波「ねぇ・・・イクス・・・」
イクス「はい、何でしょう？」
津波「これって・・・ジュエルシード？」
イクス「はい、そうです。」
あはははー偶然散歩してたら偶然ジュエルシード出会うなんて、
どんだけよ凄いの俺！？てゆうかどうするか・・・
これお持ってたらフェイト達が来るよね・・・
まぁ～早めに会ってみたいしな～
どうするか・・・
津波「とりあえず一回家に持ち帰るか。」

＜津波の部屋＞

なんやかんやで早めにフェイト達に会いたいので、
とりあえず持ち帰ったジュエルシードをどう持ってるか考えていた。

津波「とりあえずどう持ってるか・・・」
イクス「でしたらボスの得意のアクセサリー作りで、
ネックレスでも作ったらどうですか？」
津波「おぉ～それいいな！ありがとうイクス。」
イクス「いえ、お役に立てて光栄です。」

さて、早速作るか！

～一時間後～

津波「よし！出来た！」

うん、結構いい出来だ。

津波「さて、これを付けて散歩でもしてればそのうち来るだろ。」

～再び散歩中～

津波「さて、次は公園でも行ってみるか。」
あれからとりあえず買い物して、本買って、

町をぶらぶらしていた。
津波「結構歩いたな～」
そろそろ来てもおかしくはないよな・・・

～一時間後～

津波「んっ？・・・・・・来たかな？」
なんか今何かを感じた・・・超直感のおかげだな・・・
フェイト「あの～？」
ほんとに来た・・・
津波「んっ？何？」
フェイト「それ」
津波「んっ？このネックレス？」
フェイト「うん、それくれないかな？」
一応理由知ってるけど、聞いてみるか・・・
津波「何で？」
フェイト「えぇ～と、その～、お、お母さんがそうゆうの欲しいって言ってるから・・・」
やっぱりプレシアの為か・・・試してみるか・・・
津波「あげてもいいけど・・・」
フェイト「ホ、ホント！？」
津波「俺を・・・倒せればな・・・」
そう言って超死ぬ気モードなる。
フェイト「！？くっ・・・」
フェイトは慌てて俺から離れて、デバイスを構えた。
フェイト「あなたは管理局の人なんですか！？」
津波「違う・・・」
フェイト「じゃあそれｈ「フェイト～～～」！アルフ！」
アルフも来たか・・・
アルフ「こいつ、管理局かい？」

フェイト「違うみたいだけどこの子、ジュエルシード持ってる。」
アルフ「本当かい！？そこのガキ！大人しくそれを渡せば痛い目みなくてすむよ！」
そう言ってアルフも構える。
津波「断る・・・」
アルフ「じゃあー痛い目にあってもらおうか！！！」
そう言ってアルフは俺に蹴りをかまして来たが・・・

シュン！！！

フェイト「！？消えた！？」
アルフ「どこいったんだい！？」
津波「お前達の後ろだ・・・」
フェイト・アルフ「「！？」」
フェイトとアルフは慌てて後ろをみたら
津波がいた・・・
フェイト「い、いつの間に・・・」
アルフ「転移したのかい！」
津波「違う・・・お前たちより早く動いただけだ・・・」
超直感で攻撃くるのが分かってたから簡単に避けられた。
津波「次はこっちから行くぞ・・・」

シュン！！！

アルフ「また消えた！？」
フェイト「どこから！？」
フェイトとアルフは慌てて津波を探す・・・
だが・・・
津波「ここだ・・・」
アルフ「！？ぐぁあああ！？」

フェイト「!?アルフ!?」
津波はアルフに一撃くらわせた。
津波「余所見している暇があるか・・・?」
フェイト「な!?くっ!?」
フェイトはかろうじて津波攻撃をバルディッシュで止めたが・・・
津波「遅い・・・・!」
フェイト「な!?」
津波はすでにフェイトの背後にいた。
津波「フレイムシュート!」
フェイト「きゃぁあああああ!」
フェイトに技をくらわせてノックアウト。
フェイトとアルフは互いに津波の一撃をくらい気絶した。
津波「(シュウ〜)やべ!?やりすぎた!?」

〜次回に続く〜

初戦闘後（前書き）

フラグ立てます（笑）

初戦闘後

～あらすじ～

人間チート津波は金色の死神とオレンジ色の狼に圧勝しました（笑）

＞戦闘後＞

フェイト「んっ・・・」

津波「あ、起きた？」

フェイト「うん・・・てっ！？／／／」

返事をした後、自分の状況見た瞬間一瞬で顔お赤くした。

現在の状況、フェイトとアルフは津波に膝枕されている。

津波「んっ？何か顔あk「んっ～どうしたんだいフェイト～？」

あ、そっちも起きた？」

アルフ「あぁ・・・てっ！？何してるんだい！？／／／」

何か二人とも顔赤いけど大丈夫かな？

津波「二人とも顔赤いけど大丈夫？」

フェイト「ふぇ！？だ、大丈夫だよ！？／／／」

アルフ「あ、あたしも大丈夫だよ！？／／／」

び、びっくりした～だっていきなり大声出すんだもん。

アルフ「とゆうか、何で助けたんだい？／／／」

あ、やっぱり疑問に思うよね。

津波「二人の覚悟がみたかったからかな？」

フェイト「覚悟？」

津波「そ、覚悟。何で君達はこれが欲しいんだい？」

フェイト「それは・・・お母さんが集めてるから・・・」

アルフ「フェイト！？何で言うのさ！？」
フェイト「何かこの子なら言っても大丈夫かな？って思ったから・・・」
何かえらくフェイトに信用されてるな俺。
津波「・・・それが犯罪だと分かっていてもやるの？」
フェイト「私は・・・お母さんの笑顔がまた見たいから、お母さんの笑顔を見る為なら犯罪だと分かっててても私はやる！」
アルフ「フェイト・・・」
・・・プレシアの為にここまで・・・
でも、あいつはフェイトを駒にしか考えてない最低な屑野朗なのにな・・・
津波「そっか・・・それじゃ～はい。」
そう言ってネックレス（ジュエルシード）あげる。
フェイト「ありがとう・・・」
津波「所でさ、名前教えてくんない？」
知ってるけど分かってたら怪しまれるよな。
フェイト「あ！私はフェイト・テスタロッサだよ。」
アルフ「アタシはアルフだよ。」
津波「よろしくね、フェイト、アルフ。
俺は楯宮津波、ツナって呼んで（ニコッ）」
「「・・・／／／／」」
あれ、固まっちゃた？
津波「おーい、大丈夫か？」
フェイト「ふぇ！？だ、大丈夫だよ！？／／／／（言えない、笑顔に見惚れていたなんて・・・／／／／）
アルフ「ア、アタシも大丈夫だよ！？／／／／（見惚れていたなんて言えない・・・／／／／）
津波「そ、そう・・・（汗）」
さて、これからどうするかな～？
なのは側でいくかフェイト側でいくか・・・

よし！やっぱりフェイト側にするか。
津波「ねぇ～これからは俺もジュエルシード探すの手伝うよ。」
フェイト「え！？」
アルフ「何でだい？」
津波「人手は多い方がいいでしょ？」
フェイト「そうだけど私達がやってるのは犯罪なんだよ？」
津波「そうかもね「だったら！」でも！」
フェイト「！？」
津波「友達が目の前で困ってるを見過ごすことなんて、俺には出来ない！」
フェイト「ふぇ！？と、友達？」
津波「そうだよ、フェイトもアルフも俺の友達だよ？」
フェイト「う、うん（何だろう嬉しいような悲しいような・・・」
アルフ「そ、そうかい（んっ～何だろ？嬉しいはずなのに何か変だ・・・）」
津波「だからさ、俺にも手伝わして。」
フェイト「ツナ・・・ありがとう／／／」
アルフ「アタシからもありがとう／／／」
津波「気にしないで、俺の勝手なわがままなんだからさ。」
何とかプレシアとアリシア助けられないかな？
プレシアの方は調和で何とかなりそうだけど・・・
問題がアリシアなんだよな。
俺には死者蘇生とか出来ないんだよな・・・
まぁ～その時までに考えるか・・・
津波「それじゃーこれから探すときになったら呼んで、すぐ行くから」
フェイト「うん！」
アルフ「これからよろしく頼むよ！」

〜続く〜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3061ba/

魔法少女リリカルなのは～原作を壊す転生者～

2012年1月13日19時00分発行